

## S-KYT研修事業を実施して

長野県白馬村消防団

### 1 はじめに

白馬村は、昭和31年に旧神城村と旧北城村が合併して誕生しました。本村の今日までの発展に大きく寄与したものは、登山とスキーです。

明治後年に日本に伝えられたスキーは、大正から昭和にかけて徐々に普及しました。本村においては、村の誕生の前後に裏山開発的にスキー場が造られたことが大きな転機となりました。さらに、その後の高度成長期にはスキーブームが到来し、大手資本の進出によるスキー場の拡張、新たなスキー場の誕生により、本村は一大スキーエリアへと変貌しました。

そして、本村の豊かな自然環境を求め、スキーシーズン以外にも観光客が訪れるようになりました。これにあわせて、主要産業は農業から観光業へと切り替わり、それまで過疎化により減少を続けていた人口は、昭和40年代後半に増加に転じました。この時期には、人口の増加による需要や生活環境の変化に対応するため、道路や上下水道などのインフラ整備が進められ、民間においては、次々と民宿や旅館、商店などの開業が進みました。これらによる経済効果は、建設業などの関連産業にも波及し、地域経済が好循環していました。

ところが、1990年代にバブル経済が崩壊した以降は、長引く不況から観光客は大幅に落ち込み、本村の観光業を中心とする地域経済は今日まで低迷を続けています。この間、1998年のオリンピック・パラリンピック冬季競技大会、2005年のスペシャルオリンピックス冬季世界大会といった大きなイベントはあったものの、地域経済が好転するには至っていません。

### 2 白馬村消防団の沿革

白馬村消防団は、合併により白馬村が誕生した翌年の昭和32年2月に定数630名で発足しました。その後、社会経済の変化に伴い、幾度となく消防団の組織体制を見直してきています。特に、平成7年度には白馬村消防団活性化対策検討会議を設置し、団員の資質向上、団員の確保、定数の考え方等について、10年にわたって検討を重ねました。その結果、平成18年6月に3分団9部、条例定数250名とする大きな組織改革を行いました。

全国的な景気の低迷が本村の主産業である観光業を直撃し、青年層の多くが村外へ職場を求める傾向が強まっている中ではありますが、現在、白馬村消防団には246名の消防団員が所属



研修開始



危険をみんなで考える

し、日夜約 9,000 人の住民の安心と安全を確保するため、予防消防や各種訓練等に励んでいます。

### 3 S-KYT 研修事業を実施した経緯

約 9,000 人の住民の安心と安全を確保するためには、まず、消防団員が自身の健康と安全に敏感でなければなりません。

団員に対しては、日頃の健康管理と活動時の安全管理を徹底するよう指導していましたが、団幹部会議において、ある分団長から「言葉で伝えるだけでは足りない、具体的な取り組みもあわせて行う必要がある。」との指摘がありました。また、索道（リフト）会社に勤務するある分団長からは、「KYTの実施を通じて、毎日の始業時やリフトの動作時には必ず指差し呼称を行うことで危険性を再確認し、作業時の安全性を高める活動を行うことが定例化しており、事故防止に大きく貢献している。消防団として取り組んでみてはどうか。」といった提案もありました。

白馬村消防団では、平成 22 年度に消防団員公務災害防止研修事業の一つである消防団員健康セミナーを実施していましたので、消防基金の研修事業には消防団向けの KYT、S-KYT 研修があることも知っていました。

消防団員の健康管理と安全管理に関する具体的な取り組みが求められていた中で、団幹部か

ら経験に基づく具体的な提案があったことが、この研修事業を実施する後押しになりました。

### 4 S-KYT 研修事業を実施して

平成 23 年 9 月 25 日（日）午前 10 時、白馬村消防団では初めてとなる「S-KYT 研修（4 時間コース）」が始まりました。当日は、班長以上の団員 52 名が 9 チームに分かれて参加しました。

この研修は、消防ポンプ操法訓練や水防訓練などといった毎年恒例となっているものとは違い、初めて取り組むものでありましたが、限られた時間内で行われるものでもありましたので、参加団員の不安を少しでも解消し、早い段階から研修の雰囲気に溶け込んでほしいとの願いから、チーム編制は日頃から活動を共にしている分団内のメンバーで構成しました。

自己紹介が終わり、第一の研修項目である安全管理に関する講義では、どの団員も真剣な眼差しで、消防職員 O B である講師の経験を交えた講話に耳を傾けていました。次に「指差し呼称・指差し唱和・タッチ&コール」が始まると、実際に声を出し、体を動かすことで、すっかり研修の雰囲気に馴染むことができ、その後も活気ある雰囲気の中で研修が進められました。

この研修の大部分は、チームごとに取り組む実技スタイルのものでありました。そのため、研修終了後のアンケートには、「危険に対する



イス押し込みヨシッ！



発表

感受性を高めることができた」、「日頃の消防団活動において実践していきたい」といった感想や意見が多くを占める中、「団員同士が話し合う貴重な機会であった」、「チームごとに取り組むことで共通認識と団結力を高めることができた」、「チームワークによる安全管理が重要である」などといった感想もあり、白馬村消防団の組織力を高めることができた、という副産物もあり、期待していた以上の成果を得ることができた研修となりました。

## 5 今後の取り組みについて

消防団員が活動する現場には、様々な危険が

潜んでいます。そのため、消防団員は自身の安全について人一倍敏感でなければなりませんし、組織として安全管理の徹底に取り組む必要があります。今回の研修では、S-KYTという具体的な取り組みを通じて、安全管理の重要性と安全確保の手段を再認識することができました。

S-KYT研修は、今回が初めての試みでありましたが、今後も定期的で開催することで、すべての団員が危険に対する感受性を高め、「公務災害ゼロ」を目指して消防団活動に励んでいきたいと考えます。



指差し唱和